





1 ダルフル地方を流れる水無し川 2017年 スーダン / 2 水を汲んで村に帰る母と息子 2017年 スーダン / 3 西达尔フルの州都ジェネイナの小学生 2017年 スーダン

どうしても置き去りにできない眼が、そこにあった。

南西アフリカのアンゴラ内戦を取材しに行ったときのことだ。

ポルトガルの植民地支配から独立して以来続いている内戦は、すでに四半世紀におよんでいた。国際社会は、長いあいだ本気でこの国を救おうとはしなかった。慢性化した世界の無関心がつくり出した結果として、400万人という途方もない数の人びとが難民となり、飢えと病の痛苦にあえぐ日々を送っていた。

2002年7月、写真家であるぼくは、アンゴラ中部にあるカアラという町で「国境なき医師団」が開設した集中栄養治療センターを訪れた。患者たちが、どこからともなく次から次へとやってくる。大半が女性で、色鮮やかな布を抱っこひもにして、小さな子どもを背中や腰に抱きかかえている。すでに入院している患者の家族や外来で通院する人びとは敷地の外で野営していて、野戦病院のような殺伐とした雰囲気漂う。

重度の栄養失調を治療するテント病棟に行くと、10歳に満たない子どもたちで病床は埋まり、付き添いの母親が地面にごさを敷いて横になっている。

テントのなかを歩くと、子どもの目線がこちらに集まる。飢えに傷つけられた体を支えるだけで精

一杯の様子で、眼だけがギロリと動き、こちらを凝視する。刺されるように痛ましい視線ではあったが、カメラを持った見慣れない訪問者への好奇心を失っていないことに少しだけほっとした。

「ボン・ジーア」

ポルトガル語で「おはようございます」と挨拶する。すると母親たちは決まって「オブリガード（ありがとうございます）」と返事する。

ややよそよそしい空気を感じた。文字通り「Bon dia（よい1日を）」という意味で受け取られているのかもしれないと考えつつ、なんとなくそれ以上の会話を彼女らが望まず、遠回しで「おかえりください」と言っているようにも感じて、最初は距離感がつかめなかった。

それでも懲りずに、とにかく顔を覚えてもらおうと毎日のように病棟を訪ねては、「ボン・ジーア」「コモ・ヴァイ・セウ・フィーリョ？（お子さんの具合はどうですか？）」と声をかけ、会話を重ね、写真を撮らせてもらった。

重症で入院した子どものなかには、ほんの2、3日で症状が劇的に回復する者もいる。

「子どもは飢えに弱いけど、治療が早ければ、回復する力はとても強い」

コンゴ人の男性看護師のダミアンさんは、元氣を取り戻しつつある子どもを、まるで学校のテストで満点を取ったわが子を褒めるようにかわいがった。だからこの仕事はやめられない、とでも言わんばかりに。

一方で、子ども自身の回復力を信じて治療と善意を注いでも、助からないいのちもある。

ある日、5歳くらいの子が絶命した瞬間に立ちあつた。餓死だった。

どの瞬間までが生で、どの瞬間からが死だったのか、境目がわからないほど静かな最期だった。骨格がはっきりとわかるほど骨が浮き出していた。どれだけのあいだ飢えと渴きに苦しめば、人の肉体はこれだけ痩せてしまうのだろうか。

ベッドの上で仰向けに横たわって動かない子どもにカメラを向けようとすると、アンゴラ人の女性看護師が「ここではすべてが遅すぎる。あまりにたくさんいのちが失われた」とため息をつくようにつぶやいた。そして、プラスチックのコップにくんだ水で乾ききった子どもの体を清め、ガーゼでやさしく拭き、「子どもはこんな死に方をしてはいけない」とぼくに言った。

国境なき医師団が運営するこのセンターでは、エキスパット（外国人派遣者）以外に、彼女のようにたくさんさんのアンゴラ人スタッフが働いていた。なかには自身が難民の者もいる。今にも倒れそうなのちを支え、痛みや苦しみをほんのわずかでも減らそうと献身的に働く。とても尊い仕事をしている人たちだと心から思う。

それに比べて、お前は何者なんだ。

ぼくのなかのもうひとりの自分が、そう問いつめる。

悲嘆に暮れる人たちのあいだをカメラなんか持つてうろつき、いったいどんな神経をしているんだ、と。

そこにいるべきでない者として、自分がそこにいる。そんな違和感と後ろめたい感情が撮影に向か

う気力を削いでいく。

とはいえ、これは仕事なのだ。写真家は、現実の世界で起きていることを自分の眼で見確かめるために「現場」に足を運ぶ。そしていうまでもなく、写真家が現場でできること、やるべきことは写真撮ることだ。目の前の出来事にいちいち感情移入し、うろたえてばかりいては仕事にならない。あくまでもアウトサイダーとしてインパクトのある写真を撮り、人間が直面する悲惨な現実を世界に伝えること。それが写真家に与えられた使命であり、唯一できることだ。くよくよ思い悩むのは日本に帰ってからでもできる。今は感情のスイッチをオフにして、機械のように淡々とシャッターを押して仕事をこなせばよい。

そうわりきろうとする自分と、わりきることに抵抗する自分の板挟みになってもなお、撮ろうと欲望するのが写真家の業なのだろうか。

後ろめたさにふたをして、ふたたびカメラをかまえようとしたとき、子どもの母親の背中が目に留まった。目の前で逝ってしまったわが子を一途に見つめながら、声もあげず、涙も見せず、やせ細った小さな背中を震わせていた。

看護師が子どもの両足首を包帯で縛ろうとする。このまま荼毘だびにふされるのだろうか。

せめて両手を合わせようと、息を殺して子どもの骸むらに近づき、半開きの眼の奥を覗き込む。その瞬間、写真家であるこちらが一方的に見ていたはずのその眼が、逆にぼくの眼を見つめ返し、問いつめてきたのだった。

お前に写真を撮らせるためにここに来たのではない、ぼくは生きるためにここに来たんだ、と。

その眼にたじろぎ、何歩かあとずさった。

カメラを持ってそこにいる。ただそれだけで、いのちを冒瀆しているように思っていたまれなかったが、ひとつのいのちが飢餓によって失われた事実を、そしてただ傍観することしかできなかった自身の無力をせめて記憶に刻もうと、ごめん、と心のなかで手を合わせてファイダーをぐっと覗き込んだ。

戦争、飢餓、貧困、災害……。悲しいことだが、この世界にはまさに今この瞬間も、文字通りの生き地獄を生きている人が大勢いる。自分の置かれた境遇からかけ離れた現実を生きるそんな「だれか」のもとにカメラを持っておもむき、耳を傾け、応答し、相手について少しでもわかろうとする。

でもそのたびに突きつけられるのは、その「だれか」と行きずりの写真家である「わたし」とのあいだには目には見えない境界線がある、という厳然とした事実だ。それを克服しようとしてファイダーを覗き込み、相手のまなざしと向きあおうとするのだが、それでも「だれか」の痛みを「わたし」の痛みとして感受することはできないし、「だれか」の悲しみをその人の身代わりに背負うこともできない。そのことを思い知るほど、両者のあいだに横たわる境界線は絶望的に越えがたく感じる。

「わたし」が「だれか」になれない以上、お互いの心はどこまで行っても交差することなく、わかりあえないことに苦悩しながら、永遠に境界線上をさまよい続ける他ないのではないかと不安になる。

だからといって、ぼくにとつて「わからない」は、カメラを手放す理由にはならない。むしろ、わからないからこそ、あなたのことが知りたいと、閉ざされた心の扉をノックする。「だから」と出会い、ときにぶつかり、たじろぎ、おののき、葛藤しながらもなお、心を通わせようという意志を手放さないことで、世界や他者のリアルな姿を想像する力を鍛える。そのために今日もまた、カメラと共に旅を続けている。

ダルフルで聞いたふたつの声

2017年1月、ぼくはスーダンの紛争地ダルフルにいた。

首都ハルツームから国連専用機に搭乗し、サヘルの大地を眼下に望み、西へと飛行する。

サヘルとは、サハラ砂漠南端と熱帯雨林のあいだに広がる平原地帯をいう。そこはまた、アラブ系とアフリカ系の人びと、イスラム教とキリスト教、遊牧民と農耕民が混ざりあう中間的な土地でもあった。乾いた平原が大海原のように果てしなく続くかと思いきや、ときおり隆起してできた山脈や、ワディと呼ばれる巨大な水無し川が現れる。

これまで80以上の国々を旅してきたが、はじめての土地、とくに紛争地におもむくときは今でも緊張し、慣れることはない。むしろ、年々不安が大きくなっていく気がするのとは年をとって臆病になつたせいなのか、あるいは時代がこれまで以上に緊張の度合いを高めているからなのか。

とにかく、ダルフルに無事到着した。

ダルフルはスーダンの西側にある。スペインほどの面積を持ち、地理的にはサハラ砂漠の南端に位置する半砂漠の乾燥地帯だ。ダルフルの「ダル」は家や土地を、「フル」は古くからその地域を統治していたフル人を意味する。ダルフル人の大半は牧畜を営みながら、草葺の伝統的な集落に暮らす。

「ダルフルは砂漠に侵略されつつある」

到着して早々に、現地の人から聞いた声だ。近年、急速に砂漠化が進み、家畜の飲み水や牧草地をめぐる争いごとがたえないという。

中央から遠く離れたダルフルの地で、アラブ系の人とアフリカ系の人とは長らく隣人として共生してきた。異なる民族間の結婚も珍しいことではなく、互いに足りないものを補いあい、協調して生きる世界を生み出してきた。

それがアラブ系のスーダン政府がダルフルで少数派のアラブ系の人びとを優遇する政策をとるようになると、多数派のアフリカ系の人びとのあいだで不満が高まった。ピークに達したのが2003年で、アラブ系政府勢力とアフリカ系反政府勢力が衝突し、武力紛争に発展した。少なくとも20万人が犠牲になったこの紛争を、当時の国際社会が「世界最悪の人道危機」と非難したことで、ダルフルの名は世界に知れ渡った。

それ以来、国連とアフリカ連合の平和維持部隊（PKO）が展開しているものの、牧草地や水源を

めぐる争いは依然続き、新たな難民も発生している。さらに、2011年にスーダンから独立した南スーダンの難民も流入し、状況は混沌としているのだが、外国人の入域が厳しく制限されていることもあって、内情を詳しく知ることは難しく、すっかり忘れられた紛争となっていた。

ここで、この旅の目的に少し触れておく。

今回は、国連プロジェクトサービス機関という平和構築や開発活動を実施する組織の依頼で、ダルフルでの水道や給水施設を整備する事業を撮影するためにやってきた。

ただ、援助でつくられた施設を撮影するだけでは、なぜその事業が現地が必要とされているのかが見えてこない。そこで許される範囲でその土地に暮らす人びとにじかに会い、人間と水的生活レベルでの関わりを写真で記録することで、水源の不足が長引く紛争の一因になっている現状を描こうと考えた。だが、予想していた通り、取材活動にはかなりの制約がともなった。

スーダン政府からダルフルへの入域許可は得ていたが、それで自由に写真撮影してもよいということにはならない。案内と護衛を兼ねたエスコートがつねに同行し、こちらの行動に目を光らせる。エスコートの目を盗んで撮影しようにも、どこかでだれかが監視している可能性が高い。

また運が悪かったことに、ぼくがダルフル入りする少し前に、人道支援活動に従事するネパール人が誘拐される事件が起きた。さらに、家畜を盗まれた報復に手榴弾で犯人を襲撃し、さらにその応酬で8人が死亡するという事件も続いたせいで、外国人の活動は「身の安全のため」にとくに厳しく制限された。

1日の撮影が終わると、普段ならその土地の料理やお酒を味わうのがこうした旅の大きな楽しみなのだが、ダルフルではそうもいかない。そもそも日没後の外出が認められていないのだ。インターネットもつながらないし、テレビでも見ながら軽く食事をしようとダイニングに行くと、就任したばかりの米国大統領の映像が繰り返し流れていた。食事も忘れ、テレビに釘付けになって発言を注意深く聞いた。

「イスラムを排除する」

テロリズム対策の一環として、すべての難民の受け入れを一時停止するほか、アフリカと中東の特定7か国の市民の米国入国を禁止するという。その7か国にはスーダンも含まれていた。まるでイスラム教徒のせいで、テロや暴力が広がっているかのよう的印象を操作している。特定の宗教を一括りにして敵意を煽ることをはばからない新リーダーの姿勢に、開いた口が塞がらなかった。

そもそも中東諸国、とくにアフガニスタンやイラクで多くの難民を生み出す原因を直接間接につくり、世界の大混乱を引き起こしている当事者はどこのだれなのか。スーダンにしてもそうだ。かつてハルツームにある製薬会社の工場をミサイルで爆撃して薬の供給を断ち、多くのいのちを窮地に追い込んだ歴史的事実を棚上げにして、よく言えたものだと思う。「これはムスリム・バン（イスラム教徒全般への入国禁止措置）だ！」と抗議の声をあげる人びとの怒りは、至極もつともなものだった。

米国大統領は続けて、こうも言う。

「メキシコ国境に壁をつくる」

なんと荒唐無稽な発想だろう。米国とメキシコとの国境はおよそ3200キロにおよぶ。そこに巨大な分離壁を建てるというのは現実味のない虚言ではないが、それでもこうして移民への排斥感情を煽ってきたことで人気とりに一定の効果を発揮し、大統領が自ら憎悪を撒き散らしている。

歴史を振り返れば、現在の国境線を挟んだ土地の大部分は、もともとメキシコの人たちが暮らしていた場所だったはずだ。19世紀半ば、そこにやってきたアメリカが米墨戦争で土地を奪い、テキサスとメキシコのあいだに流れるリオグランデ川を一方的に国境と定めて、メキシコを分断したのではなかったか。

国境線を引く者にとって、そこに生身の人間が暮らしている現実を想像することは難しい。だから、壁をつくるうなどという発想が出てくるのだろう。

そして極めつけは、これだ。

「アメリカ・ファースト」

米国第一主義。自国さえよければいい。自国を絶対視する姿勢を、まがりなりにも世界一の大国のリーダーが、ここまであからさまにして許されるものなのかとショックを受けるとともに、とてつもない徒労感にとらわれる。強者の論理がこれほど堂々とまかり通ってしまったら、現代社会における差別的で暴力的な空気の広がりや歯止めがかからなくなってしまうのではないか。

世界の分断を一層深める権力者の「大きな声」の数々を耳にして、胸糞が悪くなったのはぼくだけではなかったはずだ。ある意味で米国とは対極的なダルフルにいたせいも多分にあっただろうが、

アメリカをこれほど遠く感じたことはなかった。

このままではいけない。どんどん世界が閉塞していく。

分断と増悪によって混迷する時代に人と人との豊かなつながりを取り戻すために、写真家は今、どこを足場に、何に抗っていかなければならないのだろうか。

ダルフルでできることは少ない。それでもカメラを手に、その土地に生きるごく普通の人ひとりで多く出会い、つぶやきのようにこぼれる「小さな声」を拾い集めていくところから始めるしかない。

取材の自由はないが、目隠しをされているわけではない。注意深く現地の暮らしの細部を観察すれば、見過ごしがちな光景の断片に、この世界と時代の正体を見出す糸口はあるはずだ。人びとの表情や身ぶりにも言葉にならない声や潜んでいるはずだ。そこに耳をそばだてること。小さな声の響きに、ダルフルの人びとが直面させられている苦境をリアルに想像すること。

祝福のシャワーを浴びる少年

20年もの長きにわたり経済制裁を受けてきたせいなのか、ダルフルの人びとの生活環境はとも慎ましい。しかし、その土地が本来的に持つ豊かさが育んだのであろう、陽気で親切な気質は失われていなかった。

「アッサラーム・アレイクム」（あなたたちに平和を）

「アル・アムハムドゥリラ」（神様のおかげで）

道ですれ違おうと、だれもが人懐っこく挨拶に応じてくれる。

日本人は珍しいはずだが、だれもこちらを奇異の目で見ない。なかには初対面のぼくを家に招こうとする人もいる。悪意は微塵も感じられない。裏のない善意が逆に怖いほどだ。

行きたい。知りたい。

なんとかしてエスコートの目をごまかせないかと最初は企んだが、勝手な行動をしてトラブルが起されれば、団体の活動に支障が出る恐れがある。そうなれば本末転倒だ。エスコートの目を盗むのではなく、むしろ巻き込んでいく作戦に切り替えることにした。

たとえばこうだ。エスコートの警察官に「喉が乾いちやって、ダルフルの伝統的なティー（お茶）を飲みたい」とリクエストしたところ、「それなら近くにいいティーを出す店を知っている」と店内案内してくれたことがあった。そこで警察官もお茶を飲み、顔見知りの客と談笑しているあいだに、店の周辺で写真を撮る、そんな具合だ。

または、給水所で撮影したあと、「ダルフルの人がどんな家で暮らしているか見てみたい」とお願いすると、水の利用者は喜んで自宅に連れていってくれた。草葺の仕切りに囲まれた家のなかには素敵な中庭があって、女性たちが給水所から引いた水でレモンやブーゲンビリアの木を大切に育てていることを知った。

あるコミュニティを訪問したときは、エスコートの警察官や兵士と一緒にランチに招待された。大きなアカシアの木陰にごごを敷き、大皿に盛られたラム肉に山羊乳のチーズをたっぷりかけたダルフルの伝統料理が振る舞われた。白いターバンを頭に巻いた男たちとひざを突きあわせ、現地流に手で食べる。炭火焼のナンでラム肉を挟み、豆のスープに浸す。食べきれないほどの量は、遠くから来た旅人をもてなさずにはいられないダルフル人のホスピタリティ（歓待の精神）の証だった。

写真家が訪れた土地の人びとと食事をして、会話を重ね、視線を交わし、そこに流れている時間を共に過ごす。それは「報道」という仕事では、特段語るに値しないことのように思えるけれど、ダルフルのような紛争地で外国人がそれを実践するのは稀有なことなのだ。

だからだろう。こうしたとるにたらない経験の記憶のほうが鮮明だ。自分たちとそれほど変わらないうあたりまえの暮らしがそこにあることを体感することで、偏った情報でがんじがらめにされたダルフルへの先入観が柔らかくほぐされていく。

給水所のまわりでは、赤や緑、オレンジの色をした鮮やかなショールをかぶった女性たちが、空のポリタンクを並べて給水の順番を待つ。水が出ないことに苛立つ様子もなく、井戸端会議に花を咲かせている。

「ダルフルの暮らしについて教えて下さい」

と単刀直入に質問しながら女性の輪に割り込む。村のリーダー格の男性が近づいてきて代弁しようとするのだが、男性をさえぎるように女性たちが口々に「小さな声」を発し始める。

——ダルフルはリッチなところよ。
——わたしたちの足下にはたくさん水が眠っているわ。
——でも砂漠に侵略され、水と土地をめぐる争いが起きているの。

——石油はなくても生きていけるけど、水がなければ生きていけないでしょう。
日本で暮らしていると、水のありがたみを心底から感じることは難しいが、ダルフルにいと、「何はなくとも水」という生活感覚はスツと体に染みわたる。

水がなければ森は枯れ、家畜は死に、人は飢え、争いごとが増えて戦争になる。水があれば、乾いた大地は緑に変わり、食料を奪いあうこともなく、子どもを安心して産み育てることが出来る。そうした水と人間とのよい関係のなかで、暴力の芽は摘まれていく。水のないところで人はいのちを守ることはできない。つくづく、水は平和の源なのだと思えられた。

母親の手伝いで水汲みにやってきた少年は、身軽さを武器にロバにまたがって、水でいっぱいになったポリタンクから空のポリタンクへのホースの出し入れに忙しい。カメラを向けると、張り切るのはいがこちらを意識しすぎて、ホースを抜くタイミングが遅れ、ポリタンクの口から水が「ボンッ」と勢いよく飛び出した。

水しぶきを全身で浴びる少年のはじけるような笑顔に反応して、シャッターを切る。その瞬間、ぼくにはそれが、乾いた大地から水を得る感謝を深く知る者たちへの祝福のシャワーに見えたのだった。



母親の水汲みを手伝う少年 2017年 スーダン

まなざしが交差する十字架へ

写真家として、そんなささやかな瞬間に心を震わせる。

そうした経験を一つひとつ積み重ねることで、自分の内に知らぬあいだにこしらえてしまった「こちら」と「あちら」を隔てる境界線が徐々に溶けていくのを感じる。言葉や文化の違いを越え、予断なく、あるがままに他者と出会うとき、ふたつの異なる世界の流れが汽水域のように混じり始め、生きることの新しい可能性が開かれていくような気がするのだ。

宿舍のダイニングで街の食料品店で見つけたノンアルコールビールを飲んでみると、連日テレビのニュース番組に登場する米国大統領の「大きな声」が否が応でも耳に入ってくる。酔ってはいなかったが、このダルフルの大地から野次らずにはいられない気分になった。

「何がアメリカ・ファーストや。ヒューマニティ・ファーストやろう！」

この熱量をできるだけそのまま写真展にして伝えようと、帰国して早々に準備に取り掛かった。それを個展「ボーダーランド——境界を生きる者たち」として、2017年5月に東京・銀座のキヤノンギャラリーで発表した。

その挨拶文で、ぼくは次のような文章を記した。

国家や国境といった支配的な原理によって隔てられ、囲われ、塞がれた土地に、しばしばボーダーランドはある。そこには苛烈な現実があるが、閉じ、締め出し、線を引く者は痛覚が希薄化しているため、そこに生きる者たちの痛みをありありと感ずることが難しい。また、その痛みを経験しなかった者にとっても、ボーダーランドを生きる一人ひとりに家族や物語があり、日々の言葉や行動に込める祈りがあり、死と共に生があることを想像することは、やはり難しい。自分にとってもそう。痛覚の希薄化に抗しようと、越えていくものとして境界を捉え直し、「わたし」と「あなた」のあいだに接続する一点を探そうと苦闘する。煩悶し、立ち往生し、揺さぶられた時間こそがぼくを写真家にした。

ダルフルでの高揚感を引きずりながら書いたせいかわい、ずいぶん気負った言いまわしになってはいるが、ぼくがずっと考え続けてきた境界（ボーダー）というテーマを写真と言葉で可視化することで、これまでおぼろげだった「越境のヴィジョン」が少しずつ輪郭を現してきた。

それはつまり、境界（ボーダー）を人と人をわける線（ライン）ではなく、人と人が出会う開かれた場所（ランド）と捉え直すことで、分断を乗り越え、他者と共にいられる場⇨ボーダーランドとして世界を再想像すること。

そのきっかけはどこにあるのか。アフリカのダルフルのような、ぼくたち日本人の日常から遠く離れた土地まで旅をしなければ、それは経験できないものなのか。

そのことを考えるヒントは、案外すぐ近くにあった。

写真展の期間中、ギャラリーに客足が途絶えてひとりになったときだった。引き伸ばされて壁に飾られた写真とあらためて対峙し、それを見つめるぼくのまなざしが写真のなかのボーダーランドを生きた者たちのまなざしとシンクロしている感覚になったとき、自分を外へ外へと向かわせる、飢えや乾きにも似た渴望の感覚が生々しく蘇ってきた。

あつ、そうか。ぼくはその眼を探し求めていたのだ。

アフリカの大地で小さな声をあげている者の眼を。

明日の希望を失ってなお今を生きる悲しみの眼を。

その眼に射抜かれることもある。その眼に挫折することもある。それでもなお、お前は何者なんだ、と厳しく問いつめる眼に自分を開いておくこと。

見つめ、見つめられ、まなざしが交差する十字路が、ぼくのカメラのレンズに映っている。

そこに近づけるだろうか。

そのためには、どうしても置き去りにできないあの眼が問うものについて考え続けるしかない。自分が感じたあのおのきの意味を幾度も反芻すること。ボーダーランドをめぐる旅で出会った忘れられない人びとの面影と、写真家にしかできない魂の対話を続けながら。

